

青藍の妃は
偽りの公主に愛される

卯月みか Mika Uduki



アルファポリス文庫

序章

遙輝国の首都・長栄にある西の市。周囲には商店が建ち並び、あちこちから客引きの声が聞こえてくる。

屋台の軒先から、饅頭の良い香りが漂ってきて、沓青藍は引き寄せられるように近付くと、店主に声をかけた。

「それ、二つくださいな」

供をしていた青藍付きの侍女、翠玉が、主人の庶民的な行動を慌てて止める。

「青藍様。沓家のお嬢様が、食べ歩きなんてお行儀が悪いです！」

遙輝国は広大な大陸の東に位置する国だ。治めているのは紫氏という一族で、現在の皇帝は紫龍翔という弱冠二十二歳の青年である。

青藍の実家、沓家は代々官吏の家系であり、青藍の父・沓康順も現皇帝の朝廷で役職についている。青藍はいわば良家の令嬢なのだが、屋敷の奥に籠もっているようなおとなしい性格ではなく、たびたび使用人の目を盗んでは、今日のように街に遊びに

出かけていた。

使用人たちは、おてんばな名家のお嬢様に手を焼いていたが、好奇心旺盛な娘の活発さに白旗を上げた康順が、「青藍には好きにさせておけ。自分の身ぐらい、自分で守れるように育てている」と命じてからは放任されている。

ただ一人、青藍と同年の翠玉だけが、今でも口うるさく注意し、青藍のことを心配して、外出の際には付いてくる。

「そんなことを言わないで、翠玉。後宮に入ったら、きつともう市で食べ歩きなんてできないもの」

青藍は翠玉が止めるのもかまわずに店主に金を払うと、饅頭を二つ受け取った。

「それはそうでしょうけど……」

溜め息をついた翠玉に、青藍が饅頭を差し出す。

「はい、翠玉の分」

青藍に笑顔向けられ、翠玉は目を瞬かせた。

「私もただいでよろしいのですか？」

「うん。食べ歩きができなくなるのは、一緒に後宮に入ってくれる翠玉も一緒でしょ」

青藍はもうじき現皇帝の後宮へ入宮することになっている。後宮へ一度入ってしまったら、外には出てこれられない。今日は、市井で過ごす最後の思い出として、西の市へ

遊びに来たのだ。

「本当に青藍様が後宮に……」

まるで「大丈夫ですか？」と言うように複雑な表情を浮かべる翠玉に、青藍は心外な顔をする。

「心配なくて大丈夫よ。私、この日のために研鑽を積んできたんだもの」

自信満々に胸を張る。

龍翔が皇帝の位に就いたのは二年前。それから間もなく後宮が整備され、妃候補の娘たちが入宮した。今も妃探しは続いており、資格のある十八歳となった青藍は自ら「私も龍翔様の後宮に入りたい」と父に頼んだ。

（龍翔様が皇帝になる日は、きつとくると思っていた。この機会を、私は逃さない）

青藍は以前から、龍翔の妃になりたいと望んでいた。その夢のために、学問、詩歌、楽器、舞など、人よりも抜きん出るように学んできたのだ。

もうじき、夢が叶う。

龍翔の妃となったら、それにふさわしいふるまいをしなければならぬ。歩きながら饅頭を嚙るのは今日限りにしよう。

（ちよっと寂しいけどね）

心の中で決心し、最後の一口を飲み込んだ時、

「そこのお嬢さん。ちよつくら見えていかないかい」と声をかけられた。

振り向くと、装飾品を販売している屋台の店主が手招きをしている。店先に並べられた凝った作りの耳飾りが目に入り、青藍は屋台に近付いた。

台の上には赤い天鷲絨が敷かれ、先ほどの耳飾りの他に、花の飾りの付いた簪や、漆塗りの櫛、彫刻の入った笄などが陳列されていた。手の込んだ細工物が多く、良い品揃えだ。

「綺麗ですね」

その中に、ひとときわ輝く透明な石が付いた指輪を見付け、青藍は店主に話しかけた。「おつ、お嬢さん。お目が高い。それは遙か西の国から流れてきた幸運の指輪だよ。

飾りに付いているのは硝子の珠さ。綺麗だろう？ 偶然仕入れることができた掘り出し物だよ」

「幸運の指輪？」

青藍が興味を持ったと見て取って、店主がべらべらと説明を始める。

「とある貧乏国の公女が持っていたものさ。彼女は生まれながらに病弱だったんだが、国一番の細工師が作ったその指輪を献上されてから、あら不思議。病気は治って、隣国の皇子と結婚が決まったんだ。皇子の国は裕福だったから援助も受けられて、国は

潤い、公女は皇子に大切にされて贅沢な暮らしができるようになった。たくさんの子供にも恵まれ、幸せな結婚生活を送って、長生きしたんだってさ。この指輪を手に入れば、お嬢さんも後宮に上がって、皇子を授かり、ゆくゆくは皇后様になれるよ

さあ、これぐらいでどうだい？」

店主は一通り口上を述べると、指を立てて値段を示した。なかなかの金額だ。

「硝子の珠の付いた幸運の指輪か……」

青藍はじつと指輪を見つめた後、あつげらかんと断った。

「私はいらないかな」

「この値段で幸運が手に入るんだ。お買い得だよ」

さらに推してくる店主に、青藍は肩を竦めてみせる。

「その指輪、硝子ではなくて水晶だと思います。かなりいいものだよ」

「えっ、水晶？」

青藍の言葉に、店主が目を丸くする。

「もう少し値段を上げてても、見る目のある人なら、買ってくれるんじゃないかしら。私には、その水晶に見合う分のお金は出せないから、遠慮しておきますね」

「なんと！ お嬢さん、教えてくれてありがとう！」

店主が青藍の手を取って、上下にぶんぶんと振る。

感謝されて悪い気はしない。
（いいことをしたのかな？）

青藍がそう考えた時、男が一人、屋台に近付いてきた。男は、今まさに青藍と店主が話していた水晶の指輪を掴むと、あっとい間に離れていった。

はっとして振り向いた青藍と店主が同時に叫ぶ。

「あーっ！ 盗人！」

「こらっ！ 商品を返せ！」

逃げていく盗人を追いかけようと、店主が屋台から飛び出したが、焦ったために台の脚に体をぶつけ、商品をひっくり返してしまった。

「わわっ！」

宝飾品を地面に散らばしておくわけにもいかず、店主が落ちた商品を急いで拾う。

その間にも、盗人の姿は小さくなっていく。足の速い男だ。

「待ちなさい！」

青藍は男を追って駆け出した。

「あっ、青藍様！ 待ってください！ 危ないです！」

翠玉が慌てて止めたが、青藍はそばを通りがかった馬を連れた行商人に、

「その馬、貸してください！」

と叫ぶと、行商人が返事をするよりも早く手綱を奪い取った。そうして軽やかに鞍に飛び乗る。

「行って！」

青藍が腹を蹴ると、栗毛の馬が走り出した。

「どいて！」

市を歩く人にもぶつからないよう器用に手綱をさばき、あっとい間に追いつくと、青藍は盗人の前に馬を回り込ませた。

「盗んだものを返しなさい！」

行く手を阻まれ足を止めた盗人を、騒ぎに気付いて、駆けつけた衛士が取り囲み、捕縛する。

青藍は馬から降りると盗人から指輪を取り返し、行商人のところへ戻った。お礼を言つて馬を返す。

行商人は一連の騒ぎと、青藍の行動に呆気にとられていた。

「青藍様は、おてんばが過ぎますっ」

はらはらした様子で成り行きを見守っていた翠玉が駆け寄ってきて、腰に手を当てて怒ったが、彼女は小柄で可愛らしい顔立ちをしているため迫力はない。

「えへへ」

「えへへじゃありません！」

頭を掻いた青藍にびしゃりと云った後、翠玉は額を押さえた。

「本当に、こんな調子で後宮に入って大丈夫なのでしょうか……」

「その点はしっかりやるから安心して」

翠玉が、全く信じていない顔で青藍を見る。

青藍は翠玉に信用されないことに苦笑いを浮かべた後、屋台の店主のもとへ行き、取り戻した指輪を手渡した。

店主は女神を拜むように青藍に手を合わせ、

「お嬢さん、助かったよ！硝子の指輪が水晶だってことも教えてもらったし、指輪も戻ってきたし、全部お嬢さんのおかげだよ。ありがとう、ありがとう！」

と、何度もお礼を言った。

「よかったです。それでは、私たちは失礼しますね」

青藍は宝飾品の屋台を離れると、市場の散策を再開した。付き従う翠玉が、呆れと感心の混じった声で話しかけてくる。

「青藍様は相変わらず真偽を見抜く目に長けていますね。それに、現実的です」

「現実的？」

「幸運の指輪のお話です。全く信じていなかったでしょう？」

「もので幸福になれるのなら、苦勞しないじゃない。幸運は自分で掴むものよ」

青藍は前方に目を向けた。宮廷の巨大な門が、遠目に見えている。

入宮する日と思うと、胸がときめいた。

第一章

「星が綺麗」

庭院で夜空を眺めていた青藍は、ほうと息を吐いた。

「青藍様、そんな薄着で夜中に外に出ると、風邪を引いてしまいますよ」

注意する声が聞こえ振り向くと、いつの間にかやって来たのか、翠玉が腰に両手を当てて立っていた。

「平気よ。私、丈夫なもの」

笑いながら返した青藍を見て、翠玉は眉間を押さえ「青藍様はもう……」とぶつぶつぶやく。

「青藍様は皇帝陛下の妃なので、お体は大切にしていただかないと」

肩掛けを掛けてくれた翠玉に、青藍は「ありがとう」と礼を言った。

何かと口うるさい翠玉だが、彼女が青藍を大事に思ってくれる気持ち嬉しい。

青藍が現在住まうのは、遙輝国皇帝、紫龍翔の後宮にある春花殿という殿舎だ。ひと月前、青藍は無事に入宮していた。

龍翔の父である先代の玄翔皇帝の後宮には四十人の妃嬪がいたというが、龍翔の後宮にいる妃嬪は十人に満たない。龍翔はいまだ皇子に恵まれておらず、正妻である皇后もいないという状態だった。

妃嬪の最上位は、貴妃、淑妃、徳妃、賢妃の四妃。その下には、昭儀、昭容などの九嬪が、さらに下に才人などの位が続く。

青藍自身は賢妃という位に就いている。下の位から成り上がってくる妃嬪もいる中で、実家の家柄が良く、最初から四妃の位に就いている青藍は恵まれていた。

父の康順には「お前は何かあっても主上の味方でいなさい。主上が困っておられたら、お助けするように」と命じられている。青藍自身も「龍翔皇帝のお役に立ちたい」という強い想いを抱いて入宮してきたのだが――

（後宮に入ってから、まだ一度も主上のお顔を見ていない。お会いできるのを楽しみにしていたんだけどな……）

つい溜め息が漏れる。

後宮に上がることは、青藍の夢だった。

青藍の母・彩夏は、青藍の次兄を出産した後、龍翔の乳母として後宮で働いていたらしい。

両親は謙虚で、その誉れを他人に語ることはなかったが、母が乳母を務めていたこ

とは汜家の使用人たちの誇りで、青藍は「立派な奥方様です」と周囲の者から聞かされて育った。

そんな母が病で亡くなったのは、青藍が十歳の時だ。毎日のように母の墓へ行き、泣いていた青藍の前に一人の少年が現れた。高貴な顔立ちをした少年は、青藍に「悲しいのは俺も一緒だ」と語った。

少年は「そんなに泣くと、涙で目玉が落ちるぞ」と言って、泣きじゃくる青藍を抱きしめてくれた。

自らも悲しみと孤独を腫に浮かべながら、それでも青藍をいたわり、慰めてくれた少年の優しい微笑みを、青藍はずっと忘れることができなかった。

彩夏が亡くなった三年後。青藍はあの時の少年が、彩夏が乳母を務めた龍翔皇子だったのだと知ることとなる。

当時、遙輝国は、北に隣接する真国と戦争をしていた。玄翔皇帝の命により、皇子たちは戦地へと赴いていたが、その中には第五皇子だった龍翔もいた。他の皇子たちが戦死する中、龍翔は勇猛果敢に戦って生き残り、遙輝国へ帰還した。

凱旋の行進で、馬上の龍翔を目にした青藍は「お母様の死を悼みに来てくれた男の子は龍翔皇子だったんだ」と気が付いた。堂々とした立派な姿に、胸がときめいた。

幼い憧れは、おそらくあの時、恋に変わった。

玄翔皇帝が亡くなった後、玉座に就いた龍翔の後宮が新設され、青藍はなんととして彼の後宮に入りたいと考えた。

自分磨きの努力を重ねた結果、願いは叶った。天にも昇る気持ちでやって来たというのに――

（龍翔皇帝のお渡りは、いまだないのよね……）

後宮には青藍の他にも妃嬪がいる。新参者には、なかなか興味を持ってもらえないのかもしれない。そもそも、存在を認識されていないのかもしれない……

「一応、賢妃なんだけどな。そろそろ顔を見に来てくれてもいいと思う……くしゅん」

しょんぼりとつぶやいた後、くしゃみをした青藍の背に、翠玉がそっと手を添える。「お体が冷えますので、お部屋の中へ戻りましょう」

「そうですね」

翠玉に連れられて殿舎内に入ると、廊下の方から侍女たちが騒いでいる声が聞こえてきた。

春花殿の侍女たちは素性のしつかりした者ばかりで、躰が行き届いている。騒ぐなど珍しい。

青藍は翠玉と顔を見合わせた。

「何かあったのかしら？」
 気になって様子を見に行くと、廊下の隅で侍女たちが固まり、一人の侍女を取り囲んでいた。

「どうしたの？」

自分たちが仕える主人に声をかけられ、侍女たちは、はっとした様子で振り向き、その場に膝をついた。

「お騒がせて申し訳ございません。青藍様」

かしこまる侍女たちの中に、衣装に泥の付いた侍女がいることに気付き、青藍は目を見開いた。

「鈴鈴、その姿はどうしたの？」

青藍より二つ年下で、まだあどけなさの残る顔立ちをした鈴鈴の顎には、痛々しい傷が付いており、足首も庇うようにしている。

「顔に傷が……！ もしかして、足も痛めているの？ すぐに医官に来てもらいましょう。誰か、手配を！」

青藍の指示に頷いて、侍女の一人が足早に医官を呼びに行った。

「青藍様……申し訳ございません……！」

頭を下げて青藍に謝罪した途端、鈴鈴はわっと泣き出した。

「どこでこんな怪我をしてきたの？ まさか、誰かに襲われたとか……！」

鈴鈴の様子が普通ではなく、青藍は表情を険しくして問いかけた。鈴鈴は手の甲で涙を拭いながら、震える声で答えた。

「書庫殿です……書庫殿で、幽霊に襲われました……！」

「幽霊に襲われた？」

青藍は信じられない気持ちで、鈴鈴の言葉を繰り返した。「まさか」と思ったが、鈴鈴の様子を見ると、嘘をついているようにも思えない。周りの侍女たちも戸惑いの表情を浮かべている。

「どうして夜中に、書庫殿になんて行つたの？ 幽霊に襲われたというのはどういうこと？ こちらへ来て、詳しく話してちょうだい」

鈴鈴を立たせ、支えながら手近な部屋へ連れていき椅子に座らせる。

他の侍女に薬湯を持ってくるように命じ、鈴鈴に飲ませた後、落ち着いたところを見計らって尋ねた。

「話せそう？」

「申し訳ございません。青藍様。私、お許しなく勝手に出かけていたのです。懇意にしている方に誘われて……。それで、書庫殿に……！」

言いくそにしながらも正直に話し始めた鈴鈴に、青藍は確認する。

「懇意こんいにしている方というのは、あなたの恋人？」

鈴鈴はばつが悪そうな表情でうなだれた。どうやら恋人と逢い引きするために春花殿を抜け出し、書庫殿へ行っていたらしい。禁止されてはいるが、後宮で働く侍女や女官が、隠れて宦官かんかんと「良い仲」になることはよくある事例だった。

「あなたは恋人と書庫殿で会う約束をしていたのね」

軽く溜め息をついた青藍に、鈴鈴が素直に頷く。

「はい。傳岳様ふたかくとは、いつも書庫殿でお会いしていました」

鈴鈴の恋人は傳岳という若い宦官かんかんで、後宮の各殿舎に鍵をかけて回る仕事に就いているらしい。

書庫殿は、後宮の西南外れにある建物のことだ。その名のとおりに、古今東西の書物が取められた書庫である。初代皇帝の代に造られたとも言われている建物は老朽化が激しく、薄気味が悪いため、用事がある者でなければ寄りつかない場所だった。

「書庫殿には、夜、人は来ないのです。密会するにはちょうどいい場所だと傳岳様はおっしゃっていました」

「でも、あそこには幽霊が出るって噂を聞きましたよ？ よくそんな場所で密会しようなんて思いましたね」

そばで話を聞いていた翠玉が呆れたように鈴鈴を見る。

「翠玉。その幽霊の話って、どんな内容なの？」

青藍が尋ねると、

「昔、ある妃様の侍女だった娘が、同僚たちのいじめを苦に、書庫殿の前に立つ桃の古木で首を吊って死んだそうです。書庫殿には、その娘の幽霊が夜な夜な現れて、すすり泣くんだとか……」

と翠玉は恐ろしげな口調で話した後、自分の体を抱きしめて震えた。

「私、夜中に書庫殿に行くなんて絶対無理です！ 昼間でも薄気味悪い場所だって話なのに！」

「その幽霊話は私も知っていたんです。だからやめようって傳岳様には何度も言ったのですけど、ここが一番安全だからって言われて……」

体を小さくし、鈴鈴が言い訳をする。どうやら恋人に押し切られてしまったようだ。「最初の数回は、なんともなかったんです。でも、今日、書庫殿に女の幽霊が現れたんです。光の中に、ぼうっと姿が浮かんでいて……。私と傳岳様は驚いて書庫殿を飛び出したんですけど、そうしたら今度は何かに足を取られて転んでしまって……。傳岳様は私を置いて逃げて行ってしまっし……。私、怖くて、怖くて。なんとか起き上がって、逃げ帰ってきたんです」

鈴鈴はそう言うのと、しくしくと涙を流した。

「その傳岳つて人、恋人を助けずに自分だけ逃げていくなんて最低野郎ね！」
 頬を膨らませた青藍を、翠玉が「お妃様が野郎なんて言葉を使っってはいいけません」と注意する。

「鈴鈴、今後はその男と付き合わない方がいいわ」

青藍が言い聞かせると、鈴鈴はしゅんとした様子で「はい」と頷いた。

「それにしても……書庫殿の幽霊か。春花殿の侍女に怪我をさせるなんて許せないわ。謝らせないと」

顎に手を当て考え込んでいる青藍を見て、翠玉が怪訝な顔をする。

「相手は幽霊ですよ？ 幽霊に謝らせるんですか？」

「幽霊なんていないわ。鈴鈴に怪我をさせたのは、きつと人よ」

青藍が断言すると、翠玉と鈴鈴は目を丸くして大きな声をあげた。

「そんなことないでしょう！」

「私が見たのは、確かに幽霊でした！」

「暗闇の中で怖い目に遭ったから、そう思い込んでいるだけ。世の中の不思議には理由があるの」

信じられない様子の二人に、青藍は自信満々に笑って見せた。

後宮に上がりたい一心で勉強に励んだ青藍は、元来の好奇心旺盛な性格も影響し、

新しい知識を増やすこと自体に夢中になった。遙輝国の書物だけではなく、この国よりも発展しているという遠い西国の書物も取り寄せ、読み漁った。

様々な知識を身につけた青藍は、その結果、伝説や不思議が当たり前のよう存在する遙輝国で、それらには理由があり、説明の付くものであるのだという、現実主義的な考え方を持つようになった。青藍にとって、幽霊などは夢物語でしかない。

翌日、青藍はさっそく、翠玉を伴い書庫殿へ向かった。

「本当に行くのですか？ 幽霊探しは他の者に任せては？」

颯爽と前を歩く青藍に付き従いながら、翠玉が勧める。声音には「行きたくない」という消極的な響きが滲んでいた。

「行くわ。後宮には、古い書物が集められた書庫殿があるって聞いていたから、もともと入宮したら行ってみたいなあって思っていたの」

青藍と翠玉の主従に気付き、歩いてきた宦官が足を止めて礼をする。

後宮は大きく三つの部門に分かれている。青藍たち妃嬪が属する内官、皇帝や皇后に従事する宦官が属する内侍省、後宮内の実務を行う女官が属する宮官だ。

宮官には後宮全体の統括をしている尚宮局や、服飾の管理をしている尚服局、料理を担当している尚食局など、六つの局と、後宮内の違法行為を取り締まる宮正がある。

その下には、さらに身分の低い下女や宮婢がいて下働きをしており、皇帝と妃嬪たちの生活を支えている。

後宮内には、それらの省や局の入る殿舎や、妃嬪の住まう殿舎が建っている。妃嬪たちの殿舎は中央から東側にかけて、内侍省、宦官の六局一正、書庫殿などの殿舎、食料庫、工房など生活に密着した施設は西側に建っていた。

「昼間から幽霊なんて出ませんよね。聞いたところによると、幽霊は首に白い布を巻きつけ、顔は真っ青にむくんでいて、死んだ時と同じ見るも哀れな姿をしているのだそうです。そんな女性に出会ったら、私、卒倒してしまいそう……」

しきりに恐れる翠玉に、青藍は発破をかける。

「もし幽霊が存在するとしても、昼間には出ないでしょう。怖がりすぎよ、翠玉。大丈夫、大丈夫！」

六局一正の殿舎が建ち並ぶ地区から先に進むと、周囲は次第に物寂しい様子に変わってきた。

このあたりから少し離れたところには浣衣局という洗濯場がある。特に身分の低い宮婢が洗濯の仕事に就いている場所だ。罪を犯した女官や病を得て他の仕事ができなくなった者なども送られる最下層の場所であり、皆、浣衣局に配属されることを恐れている。

さらにしばらく歩くと、正面に古びた門が見えてきた。

「書庫殿はあそこかしら」

青藍はまっすぐに歩を進める。

朽ちかけた門をくぐると、目の前に立派な造りの殿舎が現れた。昔は美しかったであろう殿舎は、今は緑色の瓦屋根は割れ、朱色の柱はくすみ、壁には葛が這っている。建物の周囲は雑草で覆われていたが、扉のそばに立つ桃の古木は花が満開で、青い空に柔らかな紅色が映えていた。

書庫殿の前で、一人の宦官が手に鎌を持ち、しゃがんで草を刈っていた。青藍が近づいていくと、足音に気が付いたのか振り返った。

「こんにちは」

「おや、こんな場所に貴人がいらっしやるとは」

宦官が立ち上がり、珍しそうに青藍の顔を見つめる。歳は四十過ぎといったところだろうか。青藍が貴人とわかりつつもへりくだらない様子に、青藍は逆に好感を覚えた。

「花がとても綺麗ですね。あなたはここの管理をしている方ですか？」

青藍が尋ねると、宦官は丁寧にお辞儀をした。

「はい。私は書庫殿の管理をしており、稜水魚と申します。そのお姿……沱賢妃

様でいらっしやいますね」

「そうですか……よくわかりましたね」

目を丸くする青藍を見て、水魚が微笑む。

「青は春花殿の色ですから。ひと月前、春花殿に、年若い妃ねいが入宮したことは聞き及んでおりますゆえ」

「ああ、なるほど……」

青藍は自分の衣装に目を向け、納得した。今日身につけているのは、金糸で花の刺繡しゅうが施された藍色の裙くろだ。上衣も青糸で統一している。

四妃が住まうのは、春花殿、夏涼殿かりう、秋華殿しゅうか、冬晶殿とうしょうと呼ばれる殿舎だ。

春花殿には青藍が、夏涼殿には淑妃の紅香蓉こうかようが、秋華殿には貴妃の鵬白葉ほうはくようが、冬晶殿には徳妃の梨麗りれい己きが住んでいる。

四妃の殿舎には決まった色があり、春花殿から四季順に、青、赤、白、黒となっていた。

青藍が青い衣装を着ているのは、殿舎の色に従っているからだ。

「おっしゃるとおり、私は、賢妃の氾青藍です。書庫殿の中を見せてもらってもいいですか？」

「先客がいらしていますが、寛容な方なので、おそらく大丈夫でしょう。ご案内しま

す。どうぞ、足元にお気を付けて」

水魚が微笑み、青藍を書庫殿の入り口へ案内する。地面には、水魚が刈ったと思われる雑草が積んであった。東にするためなのか、草同士を結んである。不思議な処理の仕方に、青藍は興味を引かれた。

(バラバラにならないようにしているのかしら。紐ひもを使わないって合理的ね)

水魚なりのコツなのかもしれない。

「氾賢妃様、こちらへ」

名前を呼ばれて顔を上げると、水魚が書庫殿の扉を開けていた。

建物の中へ足を踏み入れる。ひんやりとした空気と、紙と墨すみの匂いが、青藍の鼻腔をついた。

所々、明かり取りとして窓が開いていたが、殿舎の中は薄暗い。天井まで届く書棚に、数え切れないほどの書物や巻物、木簡もっかんがしまっている。

「すごいわ。読み放題ね」

青藍は、ここへ来た目的も忘れて弾はじんだ声をあげたが、腰が引けている翠玉は中に入ろうとしない。

「本当に入りますか？ 薄気味悪いです……」

翠玉が躊躇ためらっているうちに、青藍はさっさと中へ入り、興味津々でうろろし始

めた。

書棚に近付き、背を紐で綴じた書物を手に取る。ばらりとめくり、文字を目で追う。「これ、小さな頃に読んだことがある」

それは遙輝国の伝説が綴られた書物だった。文字を学ぶために、子供が親しむ読み物だ。

「同じ本を持っていたわ。懐かしい。何度も読み返したっけ」

青藍がひとりごとと、ふいに「誰？」と声が聞こえた。低くて丸みがあり、女性とも男性ともつかない中性的な響きをしている。

(そういえば、水魚殿が「先客がいらしている」って言っていたわね)

抜き取った書物の隙間から、声の主とおぼしき人物の体が見えた。衣装から見て女性のようにだ。青藍は本をもとに戻すと、書棚を回り込み、先客のもとへ向かった。

「先にいらしていると伺っておりましたが、お邪魔をしまして、申し訳ございません」

丁寧な謝り、顔を上げた青藍は、彼女の姿を目にして息を呑んだ。

美しい曲線を描く顔の輪郭。形の良い薄い唇。薄紫色の襦袢の胸元と裾には、銀糸で細かな刺繍が入っている。頭には紗の布を被っていて口元から上は見えないが、纏う雰囲気と衣装から、相手が貴人だと察せられる。

(色が赤白黒ではないから、四妃とは違う。紫色を身に纏えるのは……)

青藍の背筋に、緊張の汗が伝った。

「氾賢妃でしたか」

彼女もまた青藍が身に纏っている衣装の色で、春花殿に入った新しい賢妃だと察したのだろう。

「はい。氾青藍と申します」

「私は紫花麟です」

(紫氏！ やはり……！)

紫色の衣装を纏うことができるのは、皇帝の一族のみ。

現皇帝・紫龍翔には、双子の妹がいると聞いている。

もともと、前皇帝の紫玄翔には母親の違う六男二女の子供がいたが、そのうち、第一皇子、第二皇子、第三皇子、第四皇子、第一公主は早逝している。

現在、玄翔の血を継いでいるのは、第五皇子だった龍翔と双子の妹である第二公主の花麟、龍翔と母の違う第六皇子の郭慧だけだった。

「公主様でございましたか。失礼しました」

青藍は膝をついて、最高礼をした。

なぜこのようなところに花麟公主がいるのだろう。

花鱗が青藍の肩に触れる。

「かしこまらないでいいですよ。立ってください。あなたはこうしてここへ？」

促されて立ち上がると、青藍は花鱗の質問に答えた。

「私は書物が好きなのです。後宮の書庫殿にはたくさんのお書物が収められていると聞いて見に来ました」

「そうだったのですか。この書物は今後整理され、新しくできた資料館へ移されることになっていきます。すべての書物を持って行けないので、ある程度、処分されることになるでしょう。気になるものは、今のうちに読んでおいたほうがいいですよ」

花鱗に教えられて、青藍は驚いた。

「そうなのですか？」

「ええ。この建物は古いですからね。取り壊される予定です」

視線を上げて、花鱗は惜しむように殿舎内を見回す。

「風情がある建物なのに、もったいないですね」

青藍が残念な気持ちでそう言うと、花鱗が小さく笑った。

「風情ですか。この建物を見て、そのように言う方がいらつしゃるとは思いませんでした。宮女たちの間では、幽霊が出るなどと恐れられているというのに」

「幽霊の話、花鱗様も聞き及んでいらつしゃるのですね」

公主の口から幽霊話が出て、青藍の体が前のめりになる。

「私の侍女が、昨晚、ここで幽霊に襲われたのです。私はその正体を暴きたいと考えています。花鱗様、何かご存じのことがあれば教えてくださいませんか？」

「……」

花鱗は少し間を置いた後、

「同僚からいじめられて自死した女官が、幽霊となってこの書庫殿に現れると聞いています。……です。夜中にここで不埒な真似などしない方がよいでしょう。襲われたというあなたの侍女は、自業自得だと思いますよ」

そう言って、唇の端を上げた。

花鱗は、春花殿の侍女が夜中に書庫殿にやって来た理由を、青藍が詳しく語らずとも察したようだ。賢い方だと、青藍は内心で感心する。

自業自得。鈴鈴が怖い目にあつたのは、他人から見れば確かにそうかもしれない。けれど、自分に仕えてくれる侍女が悪く言われると、よい気はしない。

不満が顔に出ているのだろうか。花鱗はすぐに、

「口が過ぎました」

と謝罪した。公主に謝られ、青藍は慌てた。

「いいえ！ 確かに、侍女の行いは反省するべきものです。今後はそのようなことは

しないよう、注意をしております」

「その方が侍女のためにもよいでしょう」

花鱗は思わせぶりに微笑むと、青藍に背を向けた。

「私はそろそろ殿舎へ帰ります。氾賢妃。どうぞ、ゆつくりなさって行ってね」

裾の裾を揺らしながら、花鱗が書庫殿を出ていく。彼女の姿が見えなくなると、書庫殿の中に静謐さが戻った。

（不思議な女性だったな。花鱗公主か……。顔を隠されていたけど、主上と似ていらっしやるのかしら）

双子だとの話なので、男女の違いはあれど、面立ちは似ているかもしれない。性格はどうなのだろう。

（花鱗様と仲良く出来ないかしら）

これも何かの縁。

青藍は大胆にもそう考えた。

（仲良くなれたら、主上のお話が聞けるかも……）

長年想い続けていたとはいえ、青藍は龍翔のことを何も知らない。どんな性格で、どんなものが好きで、どんな生活をしているのかも。

（殿舎へ帰ったら、花鱗様に文を出してみようかな。今日お会いできて嬉しかった、

後日お茶にお誘いしてもよいですか。下心見え見えかしら……）

うーんと考え込んでいると、かたと足音がした。殿舎に入ってきた水魚が書棚の前の青藍に、

「何かお探しでしたら、お手伝いいたしましょうか？ 氾賢妃様」

と声をかけてきた。

（ほうっとしていたら駄目だ。私はここに幽霊の手がかりを探しに来たんだから）

青藍は水魚に「おかまいなく」と返事をする、再び書棚の間を歩き始めた。背後から、水魚と翠玉が世間話をする声が聞こえてくる。

書庫殿の中には書物や木簡だけではなく、青銅器や鏡、仏像、杯や銀盤など、雑多な骨董品も置かれていた。どれも古びていて置き方も雑なので、がらくたのように見える。ここは倉庫としても使われているようだ。

（価値のあるものではないのかな？）

青藍は棚に並べられていた鏡を手を取った。両手で持ってちょうどいい大きさの鏡は、表面に傷の一つも付いていない。曇りもなく、まだ十分使用できそうな代物だ。

「この鏡なんて使えそうなの……」

つぶやきながら矯めつ眇めつして、棚に戻そうとした時、明かり取り用の窓から西日が差し込んだ。

「もう夕方なのね」

振り返って外を見ようとした青藍の手元で、鏡が日の光を受けて反射した。まぶしさに目がくらんで思わずつぶり、再び開けた後、青藍は「それ」に気が付いた。

——幽霊が、いる。

正確には、鏡の光の中に女性のような影が映っている。

青藍は咄嗟に鏡を伏せた。光が消え、女性の姿も消滅する。もう一度、鏡を日光に当ててみると、先ほどと同じ女性の像が浮かんだ。

「なるほど、そういうこと……」

青藍は唇の端を上げた。

（幽霊はやはり存在しなかった）

「氾賢妃様」

ふいに名を呼ばれ、青藍の心臓がどきりと鳴った。

「翠玉殿が、もう夕刻なので殿舎へ戻った方がよいとおっしゃっておいでです」

振り返ると、いつの間にもそばに来ていたのか、水魚が青藍を見つめていた。

「そうね……」

もとあった場所に鏡を置く。青藍の動作を、水魚の視線が追う。青藍は鏡を気にしている様子の水魚に、さりげなく尋ねた。

「水魚殿。これらのものは、一体どういう由来の品々なのですか？」

「いつの時代のものかもわからない骨董品ですよ。美術的価値はありません。この書庫殿が取り壊される時に、捨てられることになるでしょう」

「なんだかもったいないですね」

「置いておいても、場所を取るだけですから」

青藍が惜しむと、水魚はそう言って苦笑した。

翠玉を伴い書庫殿を出ると、刈り取られた雑草は綺麗に片付けられていた。束になつていた雑草を思い出し、青藍は少し考えた後、後ろを歩く翠玉を振り返った。

「翠玉。幽霊の噂をもう少し詳しく調べてくれない？ 鈴鈴を襲った幽霊の正体に見当が付いたわ」

ふふっと笑った青藍を見て、翠玉が「本当ですか？」と目を丸くした。

「青藍様。おかしいのです」

書庫殿へ赴いた翌日。夜着に身を包む青藍の髪を梳りながら、翠玉が困惑したように話しかけてきた。

「何がおかしいの？」

「青藍様のお言いつけ通り、今日一日、書庫殿の幽霊の噂を調べました。鈴鈴さんと

手分けして、後宮の侍女や女官たちに話を聞いて回ったのですが、書庫殿の幽霊の噂が広がり始めたのは、どうやら一カ月前かららしいのです」

翠玉の報告によると、「昔、どこかの妃に仕えていた侍女が自殺をした」という噂は、それほど古いものではないという話だった。

「昔の出来事なのに、どうして今頃、噂になったんでしょう」

首を傾げている翠玉を見上げた後、青藍は顎に手を置いた。

「一カ月前か……。なら、今度は、この一カ月の間、書庫殿に何が起こっていたかを調べてみて」

青藍の注文に、翠玉は狐につままれたような顔をして「はい」と応えた。

*

鈴鈴が幽霊と遭遇した夜から五日が過ぎた。青藍は翠玉と鈴鈴を伴い、再び書庫殿へ向かった。

老朽化の激しい書庫殿に辿り着くと、鈴鈴は怖じ気づき足を止めたが、青藍と翠玉が「私たちもいるから大丈夫」と励まし、殿舎に入った。

殿舎の中は今日も薄暗く、しんと静まり返っている。燭台の火を灯した卓子の前に

水魚が座り、傍らに積み重ねられた書物を見ながら、巻紙に何やら書き付けていた。

「こんにちは。水魚殿」

青藍たちに気付き、水魚が顔を上げた。

「これは氾賢妃様」

立ち上がって深くお辞儀をした水魚のそばへ歩み寄り、青藍は卓子の前に腰を下ろした。

「お仕事の邪魔をしてごめんなさい」

水魚にも座るように促し、翠玉と鈴鈴は後ろに控えさせる。

「何をしていたのですか？」

巻紙に視線を向けて尋ねると、水魚は、

「資料館へ移す書物の一覧を作っていたのです」

と答えた。

「これらの中から、必要なものと不要なものを分けねばなりませんので、骨が折れます」

苦笑しながら書庫殿の中を見回した水魚の瞳には、一抹の寂しさが浮かんでいる。

青藍は水魚の表情の変化に注意深く目を向けながら問いかけた。

「その仕事を引き受けるために、水魚殿は書庫殿に戻って来られたのですか？」

水魚ははつとしたように青藍を見る。水魚の反応を静かに受けとめ、青藍は言葉が続けた。

「宦官の異動記録を調べました。水魚殿は昔、書庫殿で働いておられましたね。そして、十三年ほど前に、龍翔皇子の教育係として異動されました。龍翔様が皇帝となられてからもお仕えしていたそうですね。それを辞して、書庫殿の管理の仕事に戻って来られたのは、ひと月前。ちょうど、幽霊の噂話が広がり始めた頃です」

黙している水魚を、青藍は見つめる。

「この書庫殿は、水魚殿がこの管理者として戻って来られる以前から、若い宦官が女官や侍女を連れ込み、逢い引きの場として使っていたようですね」

鈴鈴が青藍の背後で、恥ずかしそうに俯いた。

「水魚殿はそれを憂いて、書庫殿に幽霊が現れるという噂を流し、不埒者がやってこないように謀った」

水魚は肯定も否定もせずに、青藍の話に耳を傾けている。

「でも、逢い引きは続いた。なので、水魚殿は幽霊を現出させ、驚かせるという強硬手段に出たのですね」

青藍はそこで一旦、ふうと息を吐いた。

「この殿舎に保管されている鏡……あれは透光鑑ですね」

透光鑑とは、鏡面に光を当てた時、反射光の中に濃淡が現れ、刻まれた模様を浮かび上がらせるといふ仕組みを持った鏡のことである。青藍が見付けた鏡は、一見普通の鏡のようだが、模様を隠した二重構造になっていたのだ。

「あなたは、宦官と私の侍女が書庫殿に忍んで来た時、あの鏡で女性の像を映し出し、驚かしたのですね。さらに怖い思いをさせようと、殿舎の外に生えていた雑草と雑草を結んで輪を作り、罫を仕掛けて侍女を転倒させた。草同士を結んだぐらいでは強度はそれほどないですし、足を引っかけたら切れます。大怪我はしなないと思っただけでしょう。翌日、あなたは、その草を全て刈り取った。——あなたの思惑通り、不埒者は二度とここへは来なくなりました」

青藍の推測に、水魚は反応を返さない。

「この場所で逢い引きをしようとした私の侍女にも反省するべきところがあります。けれど、鈴鈴は幽霊を信じ、心臓が潰れそうなほど怖い思いをしました」

青藍は水魚の目をまっすぐに見つめた。

「怖がらせ、怪我までさせるのは、やりすぎではないでしょうか？」

水魚は青藍から視線を逸らし、後ろに立つ鈴鈴を見上げた。鈴鈴は恐縮したように肩を縮こまらせている。

「鈴鈴殿。申し訳なかった」

「いいえ！　ここでいけないことをしようとした私が悪かったです！」
頭を下げた水魚に、鈴鈴が慌てて頭を下げ返す。

「それに、おかげさまで傳岳様が不誠実だということがわかり、目が覚めました」
鈴鈴の言葉を聞いて、水魚が、まるで娘を見るような顔をして「そうか」と頷いた。
「水魚殿が古巣へ戻られたのは、もしかして、書庫殿が取り壊されると知ったからですか？」

青藍の問いに、水魚は静かな口調で打ち明ける。

「ええ。取り壊しが決まり、書物を整理する必要があるとわかり、自ら主上しやうじやうにお願いしました。後宮へ入って最初に配属されたのが書庫殿でしたし、思い出の詰まった場所なのです。私の手で幕を引きませんでした」

「だから、この場所を汚されなくなかったですね」

「ええ……そうですね」

水魚は曖昧あいまいに頷き、静かに微笑んだ。

*

幽霊騒動が解決した後、青藍は勇気を出して、花麟を茶会に誘う文を書いた。

桃の枝と一緒に文を翠玉に託し、花麟の住まう清心殿せいしんてんへ使いに行かせると、翠玉は花麟の返事を携たづなえて戻ってきた。

どきどきしながら文を開けた青藍は、そこに流麗りうれいな文字で『茶会ならば、ぜひ私の清心殿で』と書かれているのを見て弾はんだ声をあげた。

「花麟様がお茶会に誘ってくださいましたわ！」

「よかったですね、青藍様。当日は素敵な衣装をご準備しますね！」

そばに控えていた翠玉も、主人と同じように喜んだ。
そして、茶会の当日。青藍は鳥の模様の入った空色の裙くを身に纏まとい、念入りに化粧を施して髪を整え、胸を弾はずませながら清心殿へ向かった。

清心殿は、木の色合いをそのまま活かして建てられた、落ち着いた佇たたずまいの殿舎だった。朱色を基調とした華やかな春花殿と雰囲気が違う。調度品も品が良く、派手派手しくはない。花麟の身分の高さに比べていささか地味な気がしたが、主人のとなりを表しているかのように見えて、青藍は好印象を持った。

応接間に通されると、薄紫色うすむらさきの袴裙姿はかまきりの花麟が青藍を待っていた。今日も紗ちやの布を被かっている。

「いらっしやい。氾賢妃」

紅べにで色付いた唇を開けて、花麟が微笑む。

「こんにちは。花麟様。今日はお招きありがとうございます」

青藍は丁寧にお辞儀をした。

「こちらへどうぞ」

促され、窓際に設けられた茶席へ向かうと、大きく開け放たれた窓の外に、花々が咲き乱れる美しい庭院が見えた。

椅子に腰かけた二人のもとに、年老いた侍女が菓子と茶を運んでくる。ふわふわと湯気の上がる饅頭や、くるりとひねった形の小麦菓子が美味しそうだ。侍女が淹れられた花茶は香りが良い。おそらく一級品なのだろう。

「氾賢妃、後宮での暮らしはいかがですか？ 主上にはお会いしましたか？」

花麟が茶杯を取りながら、中性的な声で青藍に問いかけてきた。青藍は伏し目がちに、

「それが、まだ……」

と答えた。龍翔皇帝は、青藍が入宮してから一度も春花殿を訪れていない。

「まあ、そうでしたか……」

表情を曇らせた青藍を、花麟が優しい声音で慰める。

「主上は妃嬪を平等に扱っておられます。真面目な方ですから、順番に通っておられるですよ。あまり気にしないことです」

「そうなのですね……」

(順番……)

確かに後宮には複数の妃嬪がいる。誰かに寵愛を偏らせるわけにはいかないという龍翔の配慮なのだろうか。

仕方ないと青藍は納得した。待つていればそのうち来てくれるはずだと信じた。けれどせめて、龍翔の妻の一人であるという実感がほしい。

「花麟様。私、主上のことが知りたいのです。教えていただけませんか？」
布でうつすらとしか見えない花麟の目を見つめて頼む。

「何を知りたいのですか？」

軽く首を傾けた花麟に、青藍は真剣に、

「好きなものはなんでしょうか？ 普段はどのように過ごしていらつしやるのですか？ お小さい時の主上は、どんなお子様だったのですか？」

と尋ねた。

花麟は考え込むように顎に指を当てた。

「主上が好きなのですか……。確か囲碁はお好きみたいです。あと、食べものは荔枝とか。詩も詠まれます」

「囲碁！ 私も好きです」

龍翔の趣味がわかり、嬉しくなる。青藍も囲碁は得意だ。
 (春花殿へいらした時に対局してみたい)

「普段のように過ごされているかという点に関しては、日中は政務に就いておられますよ。月に二度は朝会で大極殿に行かれます。諸官の朝参があれば、お会いになっていらっしやいますね。今は、西隣の宝珠国と講和条約を結ぶために、準備をなさっているはずですよ」

「宝珠国と講和条約ですか？ 戦は主上が皇帝になられた二年前に終わったと思っ
 ましたが、違うのですか？」

遙輝国は二年前まで、隣国の宝珠国と争っていた。国境に配置されている宝珠国の兵士が許可なく遙輝国内に入ったことを理由に、こちらから戦いを仕掛けたのだ。

宝珠国と戦が始まる前は、遙輝国は北隣の真国と対立していた。

真国は遊牧国家で、たびたび遙輝国の領土に領域侵犯を行っていた。遙輝国が苦情を申し入れると、国境を越えない代わりに、公主を王族の妻として差し出せと要求を突きつけた。

遙輝国は真国から一部の領土と年貢、馬などを得るのを条件に、第一公主の旺貴を約束の証として送った。しかし、遙輝国育ちの旺貴は遊牧民の生活に慣れることができず、国王に無礼を働いたとの罪で殺されてしまう。

送り返されてきた旺貴の首を見て、玄翔皇帝は怒り狂い、真国に攻め入った。

真国との戦は遙輝国の勝利で終わったが、それ以来、玄翔皇帝は周辺諸国に対して過剰な警戒心を抱くようになり、それが宝珠国との戦へと繋がっていった。

龍翔が皇帝に即位した後は、宝珠国から遙輝国の兵を撤退させ、戦は終了したと思われていたが――

青藍がそう問うと、花麟は目を伏せ、暗い声音で答えた。

「水面下では、お互いに問者を送り合って、相手の出方を探っていますよ。何か問題が起これば、再び戦が勃発するでしょうね」

「そうだったのですね……。主上の妻なのに、無知で恥ずかしいです。主上は和平に向けて頑張っておられるのですね」

「ですが、朝廷内には、いまだ戦を望む一派がいます。主上の思うとおりに、なかなか事が進まないようです」

花麟が表情を曇らせる。龍翔の苦労を想像し、青藍も胸が苦しくなった。

(春花殿へ来られた際はゆっくり休んでいただけでしょう、精一杯もてなそう。お父様は、私が入宮する時、『お前は何かあっても主上の味方でいなさい』とおっしゃった。私は妻として主上を支えたい)

父の言葉を思い出し、心の中で決意を固める。

「暗い話になってしまいましたね。次は、主上の子供時代について話しましょうか」
花鱗は気を取り直したように話題を変えた。

「主上は子供の頃から勉強家でした。とても物覚えがよかったですよ。兵法の書物なども、暗記していらっしやっただけです」

「すごいですね!」

「かといえば、遙輝国の伝説を集めた子供向けの書物も愛読しておられたり」

「遙輝国の伝説といえば、夢の中で蟻の王国に行った男の話や、男装の麗人の悲恋物語などですよ。懐かしいです。私も読んでいました」

立派な皇帝も、幼い頃は夢物語に夢中になっていたのかと思うと微笑ましい。

「そういえば、先日お会いした時、氾賢妃は、書庫殿に現れる幽霊の正体を暴きたいとおっしゃっていましたね。その後、どうなったのですか? 幽霊の正体は暴けましたか?」

花鱗がどこか面白そうに青藍に尋ねた。

花鱗にも幽霊の噂話について聞いていたのだったと思い出し、青藍は、鈴鈴の事情から幽霊の正体まで、事の顛末を語った。

「書庫殿で不埒な真似をする者を懲らしめたくて、水魚殿が謀ったことでした。幽霊の噂は故意に流していたようです。宮女たちは本当に噂好きですね。水魚殿の作り話

を、たったひとりで後宮中に広めてしまうのですから」

呆れ半分でそう言った後、自分の言葉に引っかかるものを感じ、青藍は「ん?」と首を傾げた。

「作り話が、ひとりで広まる……」

思案顔で顎に手を当てている青藍に、花鱗が「どうしましたか?」と声をかける。

「あ、いいえ。ただ、宦官である水魚殿が、どのように宮女たちの間に噂を広めたのか不思議に思ったのです」

(ああいう噂は、女同士で話すことが多いのでは……?)

青藍はひとりごとのようにつぶやいた。

「水魚殿には、噂を広めてくれるような親しい宮女でもいたのかしら……」

青藍の疑問が聞こえたのか、花鱗がふっと唇の端を上げた。

「昔話をして差し上げましょうか」

「昔話?」

花鱗が穏やかな口調で語り出す。

「家族を養うために宦官になった男の物語。彼は科擧も受けられるぐらいに頭が良かったのですが、家が貧しく、勉学に打ち込める環境ではなかったのです。身分の低い者が出世しようとするならば、科擧に合格して官吏になるか、宦官になるか。彼は

後者を選んだのですね」

宦官かんかんになるには、男性機能を取らなければならない。その痛みは激しく、死に至る者もいるという。青藍は、その男の覚悟を想像した。

「彼は後宮に入り、書庫殿の管理の役目に就きました。書庫殿は、ああいう建物ですから、まあ、閑職かんじよくですね。でも、勉強が好きだった彼には天国だった。彼は收藏品の整理をしながら、多くの書物を読みました。そんなある日、一人の侍女が書庫殿を訪れました。とある妃に仕えていた彼女は、才気煥発さいきかんぱつな主人のために、役に立つ書物を探しに来たのです」

(これって、水魚殿の話……よね?)

水魚は後宮に入ってすぐ、書庫殿に配属されたと言っていた。

(侍女は、どう水魚殿に関わってくるんだろう)

いつの間にか花麟の話に引き込まれていた青藍は、二人のその後が気になった。

「彼と侍女はお互いに惹かれ合うものがあつたのでしょうか。二人が親しくなるまでそれほど時間はかかりませんでした。けれど、楽しい時間はいつまでも続かず、彼は皇子付きの教育係として取り立てられることになりました。書庫殿を去る時、彼と侍女が何を話したのかはわかりません」

「それから、二人はどうなったのですか？」

「彼は皇子に付き従う忙しい日々を送るようになり、後宮に来る機会は減りました。一方、侍女は病を得て、洗衣局に移されました。妃きに気きに入られていた彼女を妬ねたんだ同僚が毒を仕込んだとも、妃の不興を買ったとも言われていますが、真相はわかりません。侍女は間もなく亡くなりました」

「そんな」

青藍は息を呑んだ。あまりにも哀れな結末だ。

「彼……水魚殿は書庫殿が取り壊される前に自分の手で幕を引きたいと言っていました。もしかして、侍女との思い出の場所だったからですか？」

「さあ? どうでしょう。ただ……」

花麟は一旦言葉を止めると、窓の外に目を向けた。

「その侍女は、仕えていた妃が見向きもしなかった幼い公主にも、とても優しく接してくれたのです……」

庭院から吹き込んできた風が、花麟が被る布を揺らした。青藍は、今、花麟はどんな表情を浮かべているのだらうと思ったが、布がめくられることはなかった。

(幽霊の噂を流したのは、花麟様だったんだ。妃に見向きもされなかった公主というのは花麟様で、侍女との思い出の場所を守りたいという水魚殿の想いを叶えて差し上げようとしたんだ)

二人の間に沈黙が落ちた。風が運んできた花びらが、茶杯の中にふわりと浮かぶ。青藍は思い切って花麟に提案した。

「花麟様。私たち、お友達になりましょう」

「お友達？」

花麟が驚いた様子で青藍へ顔を向ける。

「はい！ 私、花麟様ともっと仲良くなりたいです」

布の下の目を見つめ、青藍が力強く言うのと、花麟は「お友達……」とつぶやいた後、ふっと唇の端を上げた。

「いいですよ。では、これからは青藍と呼ばせてもらいますね。だから青藍、あなたもどうか私のことを気安く呼んでください。堅苦しいのは、本当はあまり好きではないのです」

「わかりました、花麟。よろしくお願いしま……よろしくね」

花麟の言葉に応じ、青藍は敬語をやめた。

右手を卓子たくしの上に差し出すと、花麟も腕を伸ばした。白く華奢きゃしゃな青藍の手と、意外にも関節の出ている花麟の手が重なる。

「いつでも訪ねて来て、青藍。私もあなたのことを知りたいです」

「うん。花麟のことも教えてね」

青藍と花麟はお互いの顔を見て、ふふつと笑い合った。

青藍が清心殿を後にし、一刻程が経った頃。

「公主様。これから主上しゅじやうがいらせられると、遣いの者が知らせを持って参りました」

年老いた侍女の墨桜ぼくおうが、私室で書物を読んでいた花麟のもとにやってきた。

「主上しゅじやうが？」

花麟は、ばかりと目を瞬またたかせたが、すぐに、

「墨桜。栄養のある食事を用意して。それから、寝室も整えて」

と命じた。

墨桜が「かしこまりました」と言って去っていく。

しばらくして、清心殿に高貴な客人が到着した。

花麟が応接間で待っていると、ほっそりとした体躯たいくで、女性的な顔立ちをした皇帝・紫龍翔が入ってきた。花麟の顔を見て、にこりと笑う。

「こんばんは。突然来て申し訳ありません」

龍翔は、実の妹に対するには丁寧な様子で挨拶を述べると、長椅子に腰を下ろした。肘掛けに腕を置き、額を付ける。

「お疲れのご様子ですね。またご無理をされているのでは？」

立ち読みサンプル はここまで

花麟がいたわりの言葉をかけると、龍翔は顔を上げ、
「詔勅しろうたかくが却下されたのでね……。氾中書侍郎ちゅうしゅうじろうと詰めた案だったのだけど」と、溜め息をついた。

「もしかして、今回も鵬門下侍郎もんかじろうですか？」

龍翔が黙って頷く。花麟は「ちっ」と舌打ちをした。

「母上の差し金か……」

突然ぞんざいな口調になり、声も低くなった花麟を見て、龍翔が笑った。

「そちらの方が自然ですよ。大麒」

「そちら」が口調を指しているのだとわかり、花麟がはっとしたように口元を押さえる。

「失礼しました。ですが兄上、私の名を口にするのは……」

「いいではないですか。二人だけの時ぐらい、本名を呼んでも」

龍翔はそう言いながら身を起こすと、花麟の方へ手を伸ばした。花麟の頭から布を外す。現れたのは、龍翔と全く同じ顔だった。

「私たちはそっくりですね」

「双子ですからね。ですが、いくら双子の妹とは言え、これだけ似ていると、周囲も混乱するでしょう？ だから顔を隠しているのです」

「双子の弟、でしょう？」

龍翔が言い換えると、花麟——大麒は目を伏せた。

「弟なんていませんよ」

「私はそうは思っていない。あなたは可愛い弟ですよ」

よしよしと頭を撫なでられて、大麒は複雑な気持ちになった。もう、いい大人なのだが。

「そういうえば、大麒。さつき墨桜に聞きました。今日はこちらに氾賢妃がいらしていたとか？」

「ああ……」

大麒は、昼間ここへ来ていた青藍の顔を思い出した。「お友達になりましたよう」と言った彼女の真剣な表情を思い返し、愉快な気分になる。

「彼女は面白い妃ひめですね」

行動力があって、令嬢らしくない。

思い出し笑いをしている大麒に、龍翔が、

「何かあったのですか？」

と、不思議そうに問いかけた。

書庫殿の幽霊を青藍が暴あはいた件について話すと、龍翔は楽しそうに声をあげて